

## 詩篇 125 篇

## 都上りの歌

《主の堅固な守りへの信頼》

- 1 主に信頼する人々はシオンの山のような。ゆるぐことなく、とこしえにながらえる。
- 2 山々がエルサレムを取り囲むように、主は御民を今よりとこしえまでも囲まれる。
- 3 悪の杖が正しい者の地所の上にとどまることなく、正しい者が不正なことに、手を伸ばさないためである。

《正しい者のための祈り》

- 4 主よ。善良な人々や心の直ぐな人々に、いつくしみを施してください。
- 5 しかし、主は、曲がった道にそれる者どもを不法を行う者どもとともに、連れ去られよう。イスラエルの上に平和があるように。

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌

121 篇：巡礼の旅の歌

122 篇：エルサレム神殿到着の歌

123-133 篇：祭で歌われる祈り

134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

「祭で歌われる祈り」の第三歌。三大祭のときにエルサレムへの巡礼者が都の中で歌う詩歌のイメージです。神殿を詣で、そこから外を見渡すと、エルサレムの町がまるで城壁のように山々に取り囲まれている様子が目に映りました。「山々がエルサレムを取り囲むように、主は御民を今よりとこしえまでも囲まれる」（2節）。それはあたかも「主の守り」そのものを表しているようでした。主が御民を守ってくださっている、そのことを詩人は肌で感じたのです。そして、主に信頼する者の人生が如何に安定したものであるかを思いました。「主に信頼する人々はシオンの山のような。ゆるぐことなく、とこしえにながらえる」。主に信頼する者は山のようにどっしりと構え、風に吹かれてもびくともしない堅固さをその心に持っています。神との正しい関係にあるとき、人は確固たるアイデンティティが形成され、その人本来の自己が輝き始めます。何事にも感謝に溢れ、隣人に対する親切心に満ち、飽くなき探究心をもって人生に果敢にチャレンジしていくようになる。主の守りの中で大胆に伸び伸びと生きられるようになるのです。

しかし、主と共に歩む中にも悪魔の誘惑が入り込むことがあります。神の道から逸れさせようとする力が働き、「不正なこと」に手を伸ばさせようとするのです（3節）。「悪杖」とは悪しき者の支配を意味し、隙を見て侵入してきた勢力が聖なる領域で跋扈（はつこ）することを意味します。詩人にとっては、異教徒によるイスラエル支配という具体的な現実が思い浮かんだことでしょう。読

者一人ひとりにとっては、心の隙間に罪が入り込むことと適用できるかもしれません。私たちの心は聖霊に満たされていないとはならないのですが、満たされぬ環境に身を置いてしまうことがあるのです。

「善良な人々」「心の直ぐな人々」(4節)とは、先の「正しい者」(3節)の言い換えであり、神との正しい関係に生きている人々、すなわち主を畏れ、主を愛し、主と人格的な絆で結ばれている人を意味します。それに対し、「曲がった道にそれる者ども」「不法を行う者ども」とは、まっすぐに歩もうとしている人の足を掴んで偽りの道へと誘う人々を指すでしょう。神よりも優先したくなるものを目の前に置き、心の中で言い訳を作らせ、この世と少しずつ妥協する生き方を提案するのです。その声に聞き従っていると、気づいたときには神様が見えなくなっているということが起こり得ます。

私たちの心にしっかりと城壁を築き、聖霊に満たされ、悪しき者が入り込む余地のない生き方を志していきたいと思えます。そこにこそ、まことの「平和」(5節)があるのです。エルサレムということばの「サレム」は「シャローム」と関連しており、神の平和、神との平和に生きる道を表しています。私たちの心の中にいつも聖都エルサレムが存在し、主との愛の絆で結ばれた人生を歩み続けましょう。